

長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆「橋姫」

長谷川 端（文責）

村 駒
井 田
俊 貴
司 子

解題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』、『源氏物語秘訣』各一冊の中の岡本主水筆「橋姫」である。

綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に水辺の草を描いた下絵に、「はしひめ」と墨書きする。全丁数は四十五丁、墨付四十三丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は三丁二十三字、字高は十九糎。最終丁の末に「二更」と記す。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」⁽²⁾、玄陳筆「帚木」⁽³⁾、玄的筆「空蟬」⁽⁴⁾、岡本主水筆「夕顔」⁽⁵⁾、「若紫」⁽⁶⁾、「賢木」⁽⁷⁾、「明石」⁽⁸⁾、石井了俱筆「未摘花」⁽⁹⁾、西山宗因筆「紅葉賀」⁽¹⁰⁾、「宿木」⁽¹¹⁾、左馬助筆「花宴」⁽¹²⁾、東寺観智院筆「菱」⁽¹³⁾、北左平次行生筆「花散里」⁽¹⁴⁾、大鳥居信岩筆「須磨」⁽¹⁵⁾は、既に解題を付し翻刻した。

二、岡本主水の書写と本文のミセケチ・補入等

「橋姫」の書写者、岡本主水の伝記については、「夕顔」⁽¹⁶⁾を翻刻した際に触れたので省略するが、ミセケチ、補

入等に着目して、ここに翻刻した「橋姫」におけるその数を調べると次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「零標」に「宿木」を加えた表も掲げた。

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
橋姫	岡本主水	101	25	17	10	49	202

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
桐壺	昌琢	2	7	0	1	47	57
帚木	玄陳	0	0	2	0	0	2
空蟬	玄的	0	1	0	0	0	1
夕顔	岡本主水	76	48	2	14	113	253
若紫	岡本主水	70	49	10	14	150	293
末摘花	了俱	2	0	1	0	0	3
紅葉賀	宗因	48	29	4	7	28	116
花宴	左馬助	7	3	1	10	2	23
葵	観智院	4	4	8	3	0	19

巻	書写者	ミセケチ	補入	傍書	合点	朱点	総計
賢木	岡本主水	94	55	6	21	59	235
花散里	行生	2	2	1	1	4	10
須磨	信岩	34	33	11	55	84	217
明石	岡本主水	79	40	9	25	99	252
澗標	岡本主水	55	17	6	5	64	147
宿木	宗因	22	19	12	0	0	53

今回の「橋姫」の書写者は岡本主水であり、主水が書写した他の巻と同様、「一更」という書き入れがある。そのため、校合がなされその結果、一応ミセケチ、補入等が多いといえる。

この二つの表のミセケチ、朱点等、全ての項目についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、「若紫」の解題¹⁷で述べた岡本主水の書写した巻は校正がなされ、ミセケチ等が多いという事実を、ここでも確認し、留意しておきたい。

翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。
- 一、漢字の踊字「〳」は、そのままとした。
- 一、本文の朱点は「・」で示した。
- 一、朱合点は、傍線で示した。

(はしひめ)

そのころ世にかすまへられ給はぬ^あふる宮お
 はしけりはゝかたなともやんことなく物し給
 ひてすちことなるへきおほえなとおほし
 けるをとぎうつりて世中にはした^なめられ
 給けるまきれに中／＼いとなこりなく御
 うしろみなど物つらめしき心／＼にてかた
 かたにつけて世をそむきさりつゝおほやけ
 わたくしによ^りあ^り所なくさしはな^たれたまへる
 やうなり北方もむかしの大臣の御むすめ
 なりける哀に心ほそくおやたちのおほし
 をきてたりしさまなと思ひいて給にたと
 しへなきことおほかれとふかき御ちきりのふ
 たつなきはかりをうき世のなくさめにて
 かたみに又なくたのみかはし給へりとしころふ

1才

るに御子物し給はて心もとなかりければさ
 う／＼しくつれ／＼なるなくさめにいかで
 おかしからんちこもかなと宮そとき／＼おほし
 のたまひけるにめつらしく女君のいとうつ
 くしけなるむまれ給へりこれをかきりなく
 哀とおもひかしつききこえ給に又さしつゝき

1ウ

けしきはみ給て此たひはあとこにてもなと
 おほしたるにおなしさまにてたひらかに
 したまひなからいといたくわつらひてうせ
 給ぬ宮あさましくおほしまとふありふるに
 つけてもいとはしたなくたへかたきことおほ
 かる世なれとみすてかたくあはれなる人の
 御ありさま心さまにかけとゝめらるゝ^たほたしにて
 こそすゝしつれひとりとまりていとゝすさま
 しくもあるへきかないはけなき人々をもひと
 りはくゝみたてんほとかきりある身にて

2オ

いとをこかましう人わあかるへきことゝおほし
 たちてほいもとけまほしうし給ひけれと
 みゆつる人なくてのこしとゝめんをいみしく
 おほしたゆたひつゝとし月もふれはをのゝ
 およすけまさり給ふさまかたちのうつくし
 うあらまほしきを明くれの御なくさめにて
 をのつからそ過し給のちにむまれ給し君をは
 さふらふ人々もいてやおりふし心うくなとつち
 つふやきて心にいれてもあつかひきこえさ
 りけれとかきりのさまにてなにこともおほ

しわかさりしほとなからこれをいと心くるしと
 思ひてたゝこの君をはかたみに見給てあ
 はれとおほせとはかりたゝひとことなん宮に
 きこえをき給ければさきの世のちぎりもつ
 らきおりふしなれとさるへきにこそは有けめ
 といまはとみえしまていと哀と思ひてうし
 ろめたけにのたまひしをとおほしいてつゝこ

2ウ

の君をしもいとかなし^うしたてまつりたまふ
 かたちなんまことにいとつづくしつゆゝしき
 まて物し給けるひめ君はこゝろはせしつかに

よしあるかたにてみるめもてなしもけたかく
 心にくきさまはし給^せづるいたはしくやんこと
 なきすちはまさりていつれをもさまゝに
 思ひかしつき聞え給へとかなはぬ事おほく
 とし月にそへて宮のうち物さひしくのみな
 りまさるさふらひし人もたつきなきこゝち
 するにえしのひあへすつきゝにしかかひて
 まかてちりつゝわか君の御めのともさるさはき
 にはかゝしき人をしもえりあへ給はさりけ
 れはほとにつけたる心あさゝにておさなき

ほとをみすてたてまつりにければたゝ宮
 そはくゝみ給ふさすかにひろくおもしろき宮
 の池山などのけしきはかりむかしにかはらていと

3オ

3ウ

いたうあれまざるをつれ／＼となかめ給ふけい
 しなともむね／＼しき人もなかりければと
 りつくるふ人もなきまゝに草あをやか^{原もイ}
 にしけり軒のしのふそ所えかほにあをみ
 わたれるおり／＼につけたる花紅葉の色
 をもかをもおなし心に見はやし給しにこそ
 なくさむこともおほかりけれいと／＼しくさひし

4才

よりつかむかたなきまゝにちふつの御かさりは
 かりをわさとせさせ給て明くれをこなひ
 たまふかゝるほたしとにかゝつらふたにお
 もひのほかにくちおしうわか心なからもかな
 はさりける契とおほゆるをまいてなにゝか
 よの人めいていまさらにとのみとし月に
 そへて世中をおほしはなれつゝ心ばかりはひし
 りになりはて給てこ君のうせ給にしこなた
 はれいの人のさまなる心はへなとたはふれ
 にてもおほしいてたまはさりけりなとかさし

4ウ

もわかるゝほとのかなしひは又世にたくひな
 きやうにのみこそはおほゆへかめれとありふ
 れはさのみやは世人になすらふ御心つかひを
 し給ていとかく見くるしくたつきなき宮の
 うちもをのつからもてなさるゝわさもやと人は
 もときゝこえてなにくれとつき／＼しくき
 こえこつこともるいにふれておほかれときこ
 しめしいれさりけり御念すのひま／＼には
 この君たちをもてあそひやう／＼おやすけ給
 へはことならはしこうちへんつきなとはかなき

5才

御あそひわざとつけても心はへともを見たて
 まつり給にひめ君はらう／＼しくふかくを
 もりかにみえたまふわか君はおほとかにらう
 たけなるさまして物つゝみしたるけはひにい
 とつつくしうさま／＼におはす春のうらゝか
 なるひかけに池の水鳥とものはねうちか

はしつゝをのかしゝさえつるこゑなとをつねはは
かなきことゝ見給しかともつかひはなれぬをうら
やましくなめ給て君たちに御ことゝも
をしへきこえ給ふいとおかしけにちいさき御ほと

にとりくかきならし給ものゝねとも哀におかし

くきこゆれば涙をうけ給て

うちすてゝつかひさりにし水鳥のかりの
この世を^にたちをくれけん心つくしなりやとめ
をしのこひ給ふかたちいときよけにおはし

ます宮なり年ころの御をこなひにやせ

ほそり給にたれとさてもあてになまめき
て君たちをかしつき給御心はへになをしの
なへはめるをき給てしとけなき御さまいと
はつかしけなりひめ君御すゝりをやをらひき

よせて手ならひのやうにかきませ給をこれに
かき給へすゝりにはかきつけさなりとてかみ

5ウ

6オ

たてまつり給へははちらひてかき給

いかてかくすたちけるそとおもふにもつき水
鳥のちきりをそしるよからねとそのおりはいと
哀なりける手はおひさきみえてまたよくも

つゝけ給はぬほとなりわか君もかき給へとあれ
はいますこしおさなけにひさしくかきいて給へり

なくくもはねうちきする君なくはわれそ
すもりになるへかりけるま^まそとも^ななへはみて

おまへに又人もなくいとさひしくつれくけなる
にさまくいとらうたけにて物し給を哀に

心くるしういかおほさゝらん経をかたてにもた
まふてかつよみつゝさうかもしたまふひめ君に

ひは^わわか君にさうの御ことをまたおさなけれと
つねにあはせつゝならひ給へはきゝにくゝもあら

ていとおかしきこゆちゝみかにも母女御
にもとくをくれ給てはかくしき御うしろみの
とりたてたるおはせさりければさえなとぶか

6ウ

くもえならひ給はすまいて世中にすみつゝ御

7
才

心をきてはいかてかはしり給はんたかき人とき
こゆるなかにもあさましうあてにおほとかなる
をむなのやうにおはすればふるき世の御た

から物おほうちおとゝの ■ そつふんなにやかやと
つきすましかりけれとゆく衆もなくはかなく

うせはてゝ御てうとなとはかりなんわさとするは
しくておほかりけるまいりさふらひきこえ心よ

せたてまつる人もなしつれゝなるまゝに

うたつかさのものゝしともなとやうのすくれ

たるをめしよせつゝはかなきあそひに心をいれ

7
ウ

ておひいて給へればそのかたはいとおかしく

すくれ給へり・源氏のおとゝの御おとうと八の宮

とそきこえしを冷泉院の東宮におはしまし

し時朱雀院のおほきさきのよこさまにお

ほしかまへてこの宮を世中にたちつき給へ

くわか御時もてかしつきたてまつ給けるさ

はきにあひなくあなたさまの御なからひには

さしはなたれ給にければいよゝかの御つきゝ

になりはてぬる世にてえましらひ給はす

又このところかゝるひしりになりはてゝいまは

8
才

かきりとよろづをおほしすてたりかゝる御ほ

とにすみ給宮やけにけりいとゝしき世にあ

さましうくあへなくてうつろひすみ給へき所の

よろしきもなかりければ宇治といふ所によし

ある山さともたまへりけるにわたり給おもひ

すて給へる世なれともいまはとすみはなれ

なんを哀におほさるあしろのけはひちかく

みゝかしこましき川のわたりにてしつかなる

思ひにかなはぬかたもあれといかゝはせん花

紅葉水のなかれにも心をやるたよりによ

8
ウ

せていとゝしくなめ給よりほかのことなしかく

た^え小こもりぬる野山のすゑにもむかしの人物
し給はましはとおもひきこえ給はぬおりな
りけり

みし人もやとも煙になりにしをなにとて
わか身き^えよのこりけんいけるかひなくそおほし
こかるゝやいとゝ山かさなれる御すみかにたつ
ねまいる人なしあやしきけすなとぬ中ひ
たる山かつとものみまれになれまいりつかつ
まつるみ^ねのあさきりはるゝおりなくてあか

しくらし給にこのうちは山にひしりたちた
るあさりすみけりさえいとかしこくて世のお
ほえもか^ちゝるからねとおさゝおほやけことにも
いてつかへすこもりぬるにこの宮のかく
ちかきほとにすみ給てさひしき御さまにた
うときわさをせさせ給つゝ法文^{なふみ}などをよみな
らひ給へはたうとかりきこえてつねにまいると
しころまなひしり給へることゝものぶかき心

9
才

をときゝかせたてまつりいよゝこの世の
かりそめにあちなきことを申しらすれ

は心はかりは^はすちすのうへに思のほりにこり
なき池にもすみぬへきをいと^{かく}くおさなき
人々をみすてんうしろめたさはかりになんえひ
たみちにかたちをもかへぬなとへたてなくも
のかたりしたまふ・このあさは冷泉院にも
したしくさふらひて御経などをしへき

こゆる人なりけり京に出たるついでにま
いりてれいのさるへきふみなと御らんしてと
はせたまふこともあるついで^にゝ八の宮のいと
かしこくないけうの御さ^えしさとりふかく物し給け

るかなさるへきにてむまれ給へる人にや物し給らん
心ふかく思ひすまし給へるほとまことのひしり
のおきて^きになむみえ給ときこゆ・いまたか
たちはかへ給はすやそくひしりとかのわかき

9
ウ10
才

人々のつけたなる哀なる事なりなどの

たまはず・宰相中將も御まへにさぶらひ給て

われこそ世中をはいとすさまじく思しり

なからおこなひなと人にめとゝめらるゝはかり

はつとめすくちおしくて過しくれと申し

れす思ひつゝそくなからひしりになり給心

のおきてやいかにとみゝとよめてきゝ給・出家

の心さはもとより物し給へるをはかなきこと

に思ひとゝこほりいまとなりては心くるし

きをんなことの御うへをえおもひすてぬと

なんなけき侍りたまふとそうすさすか

にもゝねめつるあさりにてけにはたこの

姫君たち。ことひきあはせてあそひ給へ

る河浪にきほひてきこえ侍はいとお

もしろくこくらくおもひやられ侍るやとこ

たいにめつれば・みかとはゝ糸み給てさる

10
ウ

11
オ

ひしりのあたりにおひ出て此世のかたさま

はたとくしからんとをしはからるゝをおかしの

ことやうしろめたく思ひすてかたくもてわつ

らひ給らんをもししはしもをくれんほとはゆ

つりやはし給はぬなとそのたまはする・この

院のみかとは十のみこにそおはしましける

朱雀院の二十六条院にあつけ聞え給し入道

の宮の御ためしをおほしいてゝかの君たち

をかなつれくなるあそひかたきになと。お

ほしけり・中將君は中くみこの思ひすまし

給へらん御心はへをたいめんしてみたてまつら

はやとおもふ心そふくなりぬるさてあさりの

かへりいるにもかならすまいりて物ならひきこ

ゆへくまつうちくにもけしきたまはり給へ

なとかたちひたまふ・みかとは御ことつてに

て哀なる御すまゐを人つてにきく事

なときこえたまふて

11
ウ

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ
雲を君やへたつるあさりこの御つかひをさ
きにたてゝかの宮にまいりぬなのめなるきは

12
才

のさるへき人のつかひたにまれなる山かけに
いとめつらしくまちよろこひ給て所につけ
たるさかななとしてさるかたにもてはやし給
御返し

あとたえて心すむとはなけれとも世をつち
山にやとをこそかれひしりのかたをはひけ
してきこえなし給へれば猶世にうらみのこ
りけりといとおしくさらんす・あさり中將^〇
君のたうしむぶかけに物し給ふなとかたり
聞えて法文などの心えまほしき心さし

12
ウ

なむいはけなかりしよはひよりふかく思ひな
からえさらす世にありふるほとおほやけ
わたくしにいとまなくあけくらしわざとち

こもりてならひよみおほかたはかゝしくも
あらぬ身にしも世中をそむきかほならんも
はゝかるへきにあらねとをのつからうちたゆみ
まきはしくてなんすくくるをいとありか
たき御ありさまをうけ給つたへしよりかく
心にかけてなんたのみきこえさするなとねん
ころに申しなとかたりきこゆ・宮世中を

13
才

かりそめのことゝおもひとりいとはしき心のつ
きそむる事もわが身にうれへあるときなへ
ての世もうらめしうおもひするはしめありて
なんたつしんもおこるわさなめるをとしわかく
世のなか思にかなひなに事もあかぬ心はあら
しとおほゆる身の程にさはた後世をさへた
とりしり給らんかありかたさこゝにはさるへきに
やたゝいとひはなれよとことさらに仏など
のすゝめをもむけ給やうなるありさまにて
をのつからこそしつかなるおもひかなひゆけと

残りすくなき心ちするにはかゝしくもあらで過ぬへかめるをきしかた行末さらにえたとる所なく思ひしらるゝをかへりては心はつかしけなる法の友にこそは物し給なれなどの給てかたみに御せうそこかよひみつからまうてたまふ・けにきゝしよりも哀にすまぬたまへるさまよりはしめていとかりなる草のいほりに思なしことそきたりおなしき山さとゝいへとさるかたにて心とまりぬづくのとやかなるもあるをいとあらましき水の

14
才

をと浪のひゝきに物わすれうちよるなと心とけて夢をたにみるへきほともなけにすく吹はらひたりひしりたちたる御ためにはかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ女君たちなに心ちして過し給らんよのつねの女しくなよひたるかたはとをくやと

13
ウ

をしはからるゝ御ありさまなり仏の御方にはさうしはかりをへたてゝそおはすへかめるすき心あらん人はけしきはみよりて人の御心はへをも見まほしうすかにいかゝとゆかし

14
ウ

うもある御けはひなりされとさるかたをおもひはなるゝねかひに山ぶかくたつねきこえたるほいなくすきすきしきをさりことをうちいてあされはまんもことにたかひてやなと思ひかへして宮の御ありさまのいとあはれなるをねうんころにとぶらひ聞えたまひたひくま

いり給つゝ思ひしやうにうはそくなからおこなふ山のぶかき心法文なとわさとさかしけにはあらでいとよくのたまひしらす・聖たつ人さえある法師なとは世におほかれとあまりこはく

15
才

しくけとをけるしうとくの僧都そう正のきはゝ世にいとまなくきすゝにて物の心を

とひあらはさむこと／＼しくおほえ給又その
 人ならぬ仏の御てしのいむことをたりつはか
 りのたうとさはあれとけはひいやくことは
 たみてこちなけにものなれたるいと物しく
 てひるはおほやけことにいとまなくなとしつ
 つしめやかなるよひの程けちかき御まくら
 かみなとにめしいれかたらひ給にもいと
 さすかに物むつかしくなとのみあるをいと

あてに心くるしきさましてのたまひいつること
 のはおおなし仏の御をしへをもみゝちかきたと
 ひにひきませいとこよなくふかき御さとりには
 あらねとよき人は物の心をえたまふかたの
 いとことに物し給ければやう／＼みなれ奉り
 給ふたひことにつねに見たてまつらまほしうて
 いとまなくなとしてほとふる時は恋しうおほ
 え給・この君のかくたうとかりきこえ給へれば
 冷泉院よりもつねに御せうそこなとあり

15
ウ

てとしころをとにもおさ／＼きこえ給はずい
 みしくさひしけなりし御すみかにやう／＼人
 め見るとき／＼ありおりふしにとふらひきこえ
 給こといかめしうこの君もまつさるへきこと
 につけつゝおかしきやうにもまめやかなるさま
 にも心よせつかうまつり給こと三年はかりに
 なりぬ・秋のすゑつかた四きにあてゝした
 まふ御念仏をこの河つらはあしろの波も
 このころはいとゝみゝかしかましくしつかならぬ
 をとてかのあさりのすむ寺のたうにうつろひ
 給て七日のほとおこなひたまふ姫君たち

はいと心ほそくつれ／＼まさりてなめ給ける
 比中将君ひさしくまいりぬかなと思ひいて
 きこえ^給けるまゝに有明の月のまた夜ふ
 かくさし出る程にいてたちていとしのひて御
 ともに人なともなくや^つれておはしけり川のこ

16
ウ16
オ

なたなれは船なともわつらはて御馬にてな
りけりいりもてゆくまゝに霧ふたかりて
みちもみえぬしけきのなかをわけ給にいと
あらましき風のきほひにほろ／＼とおち
みたるゝ木葉の露のちりかゝるもいとひやゝ

かに人やりならすいたくぬれ給ぬかゝるありき
なともおさ／＼ならひ給はぬ心ちに心ほそく
おかしくおほされけり

山おろしにたへぬ木葉の露よりもあやなく
もろきわか涙かな山かつのおとろくもうるさし
とてすいしんのをともせさせ給はすしはのま
かきをわけつゝそこはかとなき水のなかれと
もをふみしたく駒のあしをとも猶しのひて
とようぬ^いしたまへるにかくれなき御にほひそ
風にしかひてぬ^めししらぬかとおとろくねさ
の家／＼ありけるちかくなるほとにてのこと

17
才17
才

ともきゝわかれぬものゝねともいとすこけに
きこゆつねにかくあそひ給ときくをついてな
くてみこの御きむのねの名たかきもえきか
ぬそかしよきおりなるへしと思ひつゝいり給
へはひは^わのこ系のひゝきなりけりわうしき
てうにしらへてよのつねのかきあはせなれと
所からにやみゝなれぬこゝちしてかきかへす
はちのをとも物きよけにおもしろしさうの
ことあはれになまめいたるこ系してたえ／＼き

こゆしはしきかまほしきにしのひ給へと御けは
ひしるゝきゝつけてとのぬ人めくをのこな
まかたくなしきいてきたりしか／＼なんこもり
おはします御せつそこをこそきこえさせめと
申すなにかしかゝ^かきりある御おこなひのほと
をまきらはしきこえさせんにあいなしかくぬれ／＼
まいりていたつらにかへらんうれへをひめ君の御
方にきこえてあはれとのたまはせはなんなく

18
才

さむへきとのたまへはみにくきかほうちゑみて
申させ侍らんとてたつをしはしやとめしよせて

18
ウ

としころ人つてにのみきゝてゆかしくおもふ
御ことのねともをうれしきおりかなしはしす
こしたちかくれてきくへきものゝくまありや
つきなくさし過てまいりよらんほとみなこと
やめ給てはいとほいなからんとのたまふ御け
はひかほかたちのさるなをくしき心ちにも
いとめてたくかたしけなくおほゆれは人きか
ぬときはあけくれかくなんあそはせとしも人
にても宮このかたよりまいりたちまじる人
侍ときはをとせさせ給はすおほかたかく女

19
オ

君たちおはしますことをはかくさせたまひ
なへての人にしらせたてまつらしとおほし
のたまはするなりと申せはうちわらひてあ
ちきなき御物かくしなりしかしのひ給なれと

みな人ありかたき世のためしにきゝいつへかん
めるをとのたまひて猶しるへせよわれはすき
くしき心なとなき人そかくておはします
らん御ありさまのあやしくけになへてにお
ほえたまはぬなりとこまやかにの給へはあ
なかしこ心なきやうにのちのきこえや侍らん

19
ウ

とてあなたのおまへは竹のすいかいしこめて
みなへたてことなるをゝしへよせたてまつれ
り御ともの人はにしのちうによひすゑて
このとのゐ人あひしらふあなたにかよふへか
めるすいかいのとをすこしをしあけて見給へ
は月おかしきほとに霧わたれるをなかめて
すたれをみしかくまきあけて人々ゐたりす
のこにいとさむけに身ほそくなへはめるわら
はひとりおなしさまなるおとなとゐたり
うちなる人ひとりにはしらにすこしめかく

20
オ

れてひわをまへにをきてはちをてまさく
 りにしつゝゐたるに雲かくれたりつる月の
 にはかにいとあかくさしいてたれはあぶきな
 らてこれしても月はまねきつへかりけりと
 てさしのそきたるかほいみしくらうたけに
 にほひやかなるへし・そひふしたる人はこと
 のうへにかたぶきかゝりてゐる日をかへすはち
 こそありけれさまことにもおもひをよひ給
 御心かなとてうちわらひたるけはひいます
 こしをもちかによしつきたりをよはすとも
 これも月にはなるゝ物かはなとはかなき
 ことをうちとけのたまひかはしたる御けは
 ひともさらによそに思ひやりしにはにす
 いとあはれになつかしうおかしむかしものかたり
 などにかたりつたへてわかき女房などのよ
 むをもきくにならずかやうのことをいひ
 たるさしもあらさりけんとにくゝをしはから

20
ウ

るゝをけに哀なるものゝくまありぬへき世
 なりけりと心うやりぬへし霧のふかければ
 さやかにみゆへくもあらず又月さし出なんとお
 ほすほとにおくのかたより人おはすとつけき
 こゆる人やあらんすたれおろしてみないりぬお
 とろきかほにはあらずなこやかにもてなして
 やをらかくれぬるけはひとときぬのをとませ
 すいとなよゝかに心くるしうていみしうあ
 てにみやひかなるをあはれと思給ふ・やをし
 たちいてゝ京に御くるまゐてまいるへく人
 はしらせつありつるさぶらひにおりあしくまい
 り侍にけれと中／＼うれしくおもふことすこし
 なくさめてなんかくさぶらぶよしきこえよいた
 うぬれわたるかこともきこえさせむかしと
 のたまへはまいりてきこゆかくみえやしぬらん
 とはおほしもよらてうちとけたりつることゝも

21
ウ21
オ

をきゝやし給ひつらんといひみしくはつかし
あやしくにほふ風の吹つるを思かけぬほと
なれはおとろかさりける心をそさよと心ま
とひてはちおはたうす御せうそこなと
つたふる人もいとうひくしき人なめるをお
りからにこそよろつの事もとおほいて
またきりのまきれなれはありつるみすの

まへにあゆみいてゝつゐたまふ山ざとひたる
わかき人ともはさしいらへまこえんきこえことのはもお
ほえて御しとねさしいつるさまもとくし
けなり・このみすのまへにははしたなく侍り
けりうちつけにあさき心ばかりにてはかくも
たつねまいるましき山のかげちにおもふたま
ふるをさまことにてこそかく露けきたひを
かさねてはさりともし御らんしるらんとなた
のもしう侍りといとまめやかにのたまふ・わか
き人々のなたらかに物きこゆへきもなく

22
才

きえかへりかゝやかしけなるもかたはらいた
ければ女はらのおくふかきをおこし出るほと
ひさしくなりてわざとめいたるもくるしうて・
なにこともおもひしらぬありさまにてしり
かほにもいかゝはきこゆへきといとよしありあ
てなるこゑしてひきいりながらほのかにの給ふ・
かつしりなからうきをしらすかほなるも世の
さかとおもふ給へしるをひと所しもあまりお
ほめかせ給ふらんこそくちおしかるへけれ有か
たうよろつを思ひすましたる御すまめなと

にたくひきこえさせ給ふ御心のうちはなに事
もすすしくをしはかられ侍れは猶かく忍び
あまり侍るふかさあさゝのほともわかせ給はん
こそかひはへらめよのつねのすきくしき
すちにはおほしめしはなつへくやさやうの
かたはわさとすゝむる人侍ともなひくへうも

23
才22
ウ

あらぬ心つよさになんをつからきこしめし
 するやうも侍なんつれ／＼とのみ過し侍る世
 の物かたりもきこえさせところにたのみ
 きこえさせ又かく世はなれてなかせ給

23
ウ

らん御心のまきはしにもさしもおとろかさせ
 たまふばかりきこえなれ侍らはいかにおもふ
 さまに侍らんなとおほくのたまへつゝましく
 いらへにくゝておこしつる老人のいてきたる
 にそゆつり給・たとしへなくさし過してあなか
 たしけなやかたはらいいたきおましのさまにも
 侍るかなみすのうちにしそわかき人々は もののほ
 としらぬやうに侍こそなとしゝかにいふ
 こゑのさたすきたるもかたはらいたく君
 たちはおほす・いとまあやしく世中にすまぬ

24
オ

給ふ人のかすにもあらぬ御有さまにてさも
 ありぬへき人々にとふらひかすまへきこ

え給ふもみえきこえずのみなりまさり

侍るめるにありかたき御心さしのほとは数に
 も侍らぬ心にもあさましきまで思ふ給へき
 こえさせ侍るをわかき御心ちにもおほしり
 なからきこえさせ給にくきにや侍らんといと
 つゝみなく物なれたるもなまにくき物から
 けはひいたう人めきてよしあるこゑなれば・
 いとたつきもしらぬ心ちしつるにつれしき

24
ウ

御けはひにこそなに事もけに思ひしり給
 けるたのみこよなかりけりとてよりぬ給け
 るをき丁のそはよりみればあけほのゝやう／＼
 物の色わかるゝにけにやつし給へるとみゆる
 かりきぬすかたのいとぬれしめりたるほと
 うたてこの世のほかのにほひにやとあやしき
 まてかほりみちたり・この老人はうちなき
 ぬさし過たるつみもやとおもふ給へしのふれ
 と哀なるむかしの御物かたりのいかならんつ

てに^も うちいてきこえさせかたはしをもほのめか

25
才

ししろめさせんとしころねんすのついて

にもうちませ思ふ給へわたるしるしにやうれ

しきおりに侍るをまたきにおほ^ほじれ侍る涙

にくれてえこそきこえさせす侍れとうち

わなゝくけしきまことにいみしく物かなしと

おもへり・おほかたさたすきたる人はなみたも

るなる物とはみきゝ給へといとかうしもお

もへるもあやしうなり給て・こゝにかくま

いることはたひかさなりぬるをかくあはれしり

給へる人もなくてこそ露けきみちのほと

25
ウ

にひとりのみそほちつれつれしきついてなめ

るをことなのこい給そかしとのたまへは・かゝる

ついてしもは^侍へらしかし又侍るとも夜のまのほ

としらぬ哀のたのむへきにも侍らぬをさらは

たゝかゝるふるもの世には^侍へりけりとはかり

しろしめされ侍らなん三条宮に侍しこ侍従

はかなくなり侍にけるとほのきゝ侍しその

かみむつましうおもふ給へしおなしほとの人

おほくうせ侍にける世のすゑにはるかなる

せかいよりつたはりまうてきてこの五とせ

26
才

むとせのほとなんこれにかくさふらひ侍りえ

しろしめさしかしこのころ藤大納言と申なる

御このかみの右衛門督にてかくれ給にしはもの

のついてなとにやかの御つへとてきこしめし

つたふることも侍らん過給ていくはくもへた

たらぬ心ちのみし侍るそのおりのかなしさもま

た袖のかはくおり侍らすおもふ給へらるゝを手を

おりてかそへ侍れはかくおとなしくならせ給に

ける御よはひのほとも夢のやうになんかの

故権大納言の君の御めのとに侍しは弁かは

26
ウ

はになん侍し朝夕につかうまつりなれ侍しに

人かすにも侍らぬ身なれと人にしらせず御
心よりはたあまりけることをおり／＼うちかす
めのたまひしをいまはかきりになり給にし御
やまひのすゑつかたにめしよせていさゝかの
たまひをく事侍しをきこしめすへきゆへなん
一ことは^侍れとかはかりきこえて侍にのこり
をとおほしめす御心侍らはのたになんきこ
しめしはて侍るへきわかき人々も ^{かた}はらいた
くさしすぎたりとつきしろひ侍るめるも

27才

ことはりになんとてさすかにうちいてすなり
ぬ・あやしく夢かたりかむなきやうの物のと
はすかたりするゆんやうにめつらかにおほさるれ
とあはれにおほつがなくおほしわたることのす
ちをきこゆれはいとおくゆかしけれとけに人
めもしけしきしくみにふる物かたりにかゝつらひ
て夜をあかしはてんもこち／＼しかるへければ・
そこはかと思ひ ^{わく}ことはなき物からいにしへの

事ときゝ侍も物あはれになんさらはかなら
すこののこりきかせ給へきりはれゆかはし

27ウ

たなかるへきやつれをおもなくこらんしとかめ
られぬへきさまなれはおもふたまふる心の
ほとよりはくちおしうなんとてたち給にかの
おはします寺の鐘のこゑかすかにきこえて霧
いとふかくたちわたれり嶺のやへくも思ひ
やるへたておほくあはれなるに猶この姫君
たちの御心のうちとも ^心くるしうなにごとを
おほしのこすらんかくいとおくまり給へるもこと
はりそかしなとおほゆ

朝ほらけ家ちもみえず尋こしまきの

28才

を山はきりこめてけり心ほそくも侍かなとたち
かへりやすらひ給へるさまを宮この人のめなれ
たるたになをいとおに思ひきこえたるを
まいていかゝはめつらしう見ざらん御かへりきこ

えつたへにくけに思ひたれはれいのいとつゝま
しけにて

雲のある嶺のかけちを秋きりのいとゝへた
つるころにもあるかなすこしうちなけい給へるけ
しきあさからすあはれなり・なにはかりおかし^ち
ふしはみえぬあたりなれとけに心くるしき

事おほかるにもあかつなりゆけはさすかに

ひたおもてなる心ちして中／＼なるほとにつ
けたまはりさしつることおほかるのこりは今すこ

しおもなれてこそはうらみきこゆ^きさすへかめ

れさるはかく世の人めいてもてなし給ふへく

はおもはずに物おほしわかさりけりとうらめ

しうなんとてとのぬ人^か しつらひたるにしお

もてにおはしてなかも給ふあしろは人さはかし

けなりされとひをもよらぬにやあらんすさ

ましけなるけしきなりと御ともの人々見

28
ウ29
オ

しりていふあやしき舟ともしはかりつみ
をの／＼なにとなき世のいとなみともにゆ
きかふさまとものはかなき水のうへにうかひ
たるたれもおもへはおなしことなるは^よのつ
ねなさなり我はうかはす玉のうてなにしつ
けき身とおもふへき世かはとおもひつゝけらる
すゝりめしてあなたにきこえたまふ

はしひめの心をくみてたかせさすさほの
しづくに袖そぬれぬるなかも給ふらんかしと
て殿ぬ人にもたせ給へりいと^{いと}さむけに

いらゝきたるかほしてもてまいる御返かみの
かなとおほろけならんははつかしけなるをとき
こそはかゝるおりはとて

さしかへるうちの川おさあさゆふのしつく
や袖をくたしはつらん身さへうきてといとおか
しけにかき給へりまほにめやすく物し給
けりと心とまりぬれと御車あてまいりぬ

29
ウ

と人々さはかしきこゆれはとのぬ人はかりを
めしよせてかへりわたらせ給はんほとにかなら
すまいるへしなどのたまふぬれたる御そ

ともはみなこの人にぬきかけ給てとり

つかはしつる御なをしにたてまつりかへつ・おい
人の物かたり心にかゝりておほしいてらる・思ひ
しよりはこよなくまさりておほとかにおかし

かりつる御けはひともおもかけにそひて猶お
もひはなれかたき世なりけりと心よはくおも

ひしるる御ふみたてまつりたまふけさうた

ちてもあらずしるきしきのあつこへたる

も^にふてはひきつくるひえりてすみつき見

ところありてかきたまふ・うちつけなるさまに

30
ウ

やとあいなくとゝめ侍でのこりおほかるもくる
しきわさになんかたはしきこえをきつるやうに
いまよりはみすのまへも心やすくおほしゆるす

30
オ

へくなん御山こもりはて侍らん日かすもつけ
給りをきていふせかりしきりのまよひも

はるけ侍らんとそいとすくよかにかき^結行る

左近のそ^附うなる人御つかひにてかの老人た

つねてふみもとらせよとのたまふ殿あ人か

さむけにてさまよひしなと哀におほしやり

ておほきなるひはりこやうの物あまたせさせ

給ふ又の日の御てらにも奉り給山こもりの

僧ともこのころのあらしにはいと心ほそくくる

しからんをさておはしますほとのおふせたまふへか

らんとおほしやりてきぬわたなとおほかりけり

御をこなひはてゝ出たまふあしたなりければ

をこなひ人ともにわたきぬけさころもなと

すへて一くたりのほとつゝあるかきりのたいと

こたちに給ふ・とのぬ人かの御ぬきすてのえ

むにいみしきかりの御そともえならぬしろ

きあやの御そのなよゝといひしらすにほへる

31
オ

をつつしきて身をはたえかへぬ物なれはにつ
 かはしからぬ袖のかを人ことにとかめられめてら
 るゝなん中／＼所せかりける心にまかせて身
 をやすくもふるまはれすいとむくつけきまで
 人のおとろくにほひをうしなひてはやとおも
 へところせき人の御うつりかにてえもすゝき
 すてぬそあまりなるや・君はひめ君の御返
 こといとめやすくこめかしきをおかしく見給ふ
 宮にもかく御せうそこありきなと人々聞え
 させぢぢんせさすれはなにかはけさうたちて
 もてない給はんも中／＼うたてあらんれのわか
 人にゝぬみ心はへなめるをならんのちもな
 とひとこととうほのめかしてしかはさやうにて
 心とゝめたらんなどのたまふけり御身つからも
 さま／＼の御とぶらひの山の岩やにあまりし
 事などのたまへるにまつてんとおほして三の

31
ウ32
オ

宮のかやうにおくまりたらんあたりの見まさ
 りせんこそおかしかるへけれとあらましことにたに
 の給ふ物をきこえはけまして御心さはかした
 てまつらんとおほしてのとやかなるゆふくれ
 にまいり給へりれいのさま／＼なる御物かたりき
 こえかはし給ふついてにうちの宮のことかたり
 いてゝみし暁のありさまなとくはしくきこえ
 給に宮いとせちにおかしとおほいたりされ
 はよと御けしきをみていとゝ御心つききぬ
 へくいひつゝけ給ふさてそのありけん返こと
 はなとかみせ給はさりしまろならましか
 はとつらみ給ふさかしいとさま／＼御らんすへか
 めるはしをたにみせさせ給はぬかのわたりは
 かくいともむもれたる身にひきこめてやむ
 へきけはひにも侍らねはかならず御らんせさせ
 はやと思給へれといかてかたつねよらせ

32
ウ33
オ

給へきかやすきほとこそすかまほしくはいと
 よくすきぬへき世に侍りけれつちがよろへつゝ
 おほかめるかなさるかたに見ところありぬへき
 女のおもはしきうちしのひたるすみか山
 さとめいたるくまなとにをのつから侍へりこ
 のきこえさすかわたりはいとよつかぬひしり
 さまにてこち／＼しうにあらんとしころ思
 ひあなつり侍りてみゝをたにこそとゝめ侍ら

33
ウ

さりければのかなりし月かけの見おとり
 せすはまほならんはやけはひありさまはたさは
 かりならんをそあらまはしきほとゝおほえ
 侍へきなときこえ給はて／＼はまめたち
 ていとねたくおほろけの人に心うつすまし
 き人のかくふかくおもへるをゝろかならしとゆかし
 うおほすことかきりなくなり給ぬ猶又／＼
 よくけしき見給へと人をすゝめ給てかき
 りある御身のほとよたけさをいとはしき

まで心もなしとおほしたれはおかしくてい

てやよしなくそ侍るしはし世中に心とゝめ
 しとおもひたまふるやうある身にてなを

さりこともつゝまじう侍るを心なからかなはぬ
 心つきそめなはおほきに思ひにたかふへきこ
 となん侍へきときこえ給へは・いてあなこと／＼
 しれいのおとろ／＼しきひしりことはみはて
 てしかなとてわらひたまふ・心のうちにはかのふ
 る人のほのめかしゝすちなとのいとゝうちおと
 ろかれて物あはれなるにおかしとみるこ
 もめやすしときゝあたりもなにはかり心にも
 とまらさりけり・十月になりて五六日のほ
 とにうちへまうて給あしるをこそこのころ
 は御らんせめときこゆる人々あれとなにかそ
 のひほむしにあらそふ心にてあしるにもよ
 らんとそきすて給てかららかにあしる車に

34
オ34
ウ

てかとりをなをしさしぬきぬはせてことさ

らひき給へり宮まちよろこひ給て所に

つけたる御あるしなとおかしうしなしたまふく

れぬれはおほとなふしちかくてさきくみさ

し給へるふみとものふかきなとあさりもさうし

おろしてまなといはせたまふうちもまとろ

ます川風のいとあらましきに木葉のち

りかふをと水のひききなと哀もすぎて

もの

おそろしく心ほそき所のさまなり明方ちかく

なりぬらんとおもふほとにありしくのめ思ひ

出られて夢のねのあはれなることのついて

つくりいてさきのたひきりにまとはされ

侍し明ほのにめつらしき物のねこゑつけ

たまはりしのこりな中くにいといふ

かしうあかすおもひ給へらるゝなと聞えた

まぶ色をもかをも思ひすてしちむかしき

35
才

35
才

きしこともみなわすれてなんとの給へと人め

して琴とりよせていとつきなくなり

たりやしるへする物のねにつけてなん思ひ

いてらるへかりけるとてひはめしてまらふと

にそのかしたまふとりてしらへたまふさら

にほのかにき侍しおなし物とも思給へられ

さりける御ことのひきからにやとそおもふ

給へしかとて心とけてもかきたて給はすいて

あなさかなやしき御みとまるはかりの手なと

はいつくよりかはこまてはつたはりこむある

ましき御ことなりとてきんをかきならし給

へるいとあはれに心すこしかたへはみねの松

風のもてはやすなるへしいとたとくしけに

おほめき給て心はへある手ひとつはかりに

てやめ給つこのわたりにおほえなくておりく

ほのめく生のことのねこそ心えたるにやと

きくおり侍れと心とめてなともあらて

36
才

ひさしうなりにけりや心にまかせてをのく
かきならすへかめるは川なみはかりやうちあは

36
ウ

すらんるなう物のようにすはかりのはうしなと
もとまらしとなんおほえ侍とてかきなら

し給へとあなたにきこえ給へと思ひよら

さりしひとりことをきゝ給けんたにある物を

いとかたわならんとひきいりつゝみなきゝ給

はすたひくそゝのかしきこえ給へととかくき

こえすさひてやみ給めれはいとくちあし

うおほゆ・そのついてもかくあやしうよつか

ぬおもひやりにて過すありさまともの思ひ

のほかなることなとはつかしうおほいたり人に

37
オ

たにいかてしらせしとはくゝみすくせとけふ

あすともしらぬ身の残りすくなさにさすかに

ゆくすゑとをき人はおちあふれてさすらへ

ん事これのみこそけに世をはなれんきは

のほたしなりけれとうちかたらひ給へは心く
るしう見奉り給・わさとの御うしろみたち

はかくしきすちには侍らすともつとくしから

すおほしめされんとなん思たまふるしはし

もなからへ侍らん命のほとはひとこともかく

うちいてきこえさせてんさまをたかへ侍ましく

なんなと申給へはいとうれしきことゝおほし

のたまふ・さてあか月かたの宮の御をこなひ

したまふほとにかの老人めしいてゝあひ給へり

姫君の御うしろみにてさふらはせ給ふ弁君と

そいひけるとしは六十にすこしたらぬほとなれ

とみやひかにゆへあるけはひして物なときこ

ゆ故権大納言の君のよとゝもに物を思つゝ

やまひつきはかなくなり給にしありさまをき

こえいてゝなくことがきりなし・けによその人のう

へときかたにあはれるへきふることゝもを

37
ウ38
オ

ましてとしころおほつかなくゆかしういかななり
 けん事のはしめにかと仏にもこのことをさた
 かにしらせ給へとねんしつるしにやかく夢
 のやうに哀なるむかしかりをおほえぬつい
 てにきゝつけつらんとおほすに涙とゝめか
 たかりけりさてもかくその世の心しりたる人
 ものこり給へりけるをめつらかにもはつかしう
 もおほゆることのすちに猶かくいひつたふる
 たくひや又もあらんとしころかけてもきゝをよ
 はさりけるとの給へは小侍従と弁とはなち

て又しる人侍らし一ことにても又こと人にうち
 まねひ侍らすく物はかなく数ならぬ身
 のほとに侍れとよるひるかの御かけにつき
 たてまつりて侍しかはをのつから物のけし
 きをも見たてまつりそめしに御心より
 あまりておほしけるときゝたゝふたりのな
 かになん玉さかの御せうそのかよひも侍し

かたはらいなければくはしくもきこえさせ
 すいまはのとちめになり給ていさゝかの
 たまいをくゝとの侍しをかゝる身にはをき所

なくいふせくおもふ給へわたりつゝいかにして
 かはきこしめしつたふへきとはかゝしからぬ
 ねんすのついてもおもふ給へつるを仏は
 世におはしましけりとなんおもふ給へしりぬる
 御らんせさすへき物も侍り今はなにかはやき
 もすて侍なんかくあさゆふのきえをし

らぬ身のうちすて侍りなはおちゝるやう
 もこそといとうしろめたく思給ふれとこの
 宮わたりにも時ゝほのめかせたまふをまち
 いてたてまつりてしかはすこしたのもしく

かゝるおりもやとねんし侍つるちからいてまう
 てきてなんさらにこれはこの世のことにも侍
 らしとなくゝこまかにむまれ給けるほどのこ

ともよくおほえつゝきこむなしうなり給し
 さはきにはゝに侍し人はやかてやまひつき
 てほともぢすかくれ侍りにしかはいとゝおもふ
 給へしつみふちころもたちかさねかなしきこと
 を思給へしほとにとしころよからぬ人の心を
 つけたりけるか人をはかりこちてにしの海の
 はてまでとりもてまかりにしかは京のこと

40
才

さへあとたえてその人もかしこにてうせ侍に
 しのちとゝせあまりにてなんあらぬ世の心ち
 してまかりのほりたりしをこの宮はちゝか
 たにつけてわらはよりまいりかよふゆへ侍し
 かは今はいかにましらふへきさまにも侍ら
 ぬをれいせい院の女御とのゝ御かたなどこそ
 はむかしきゝなれ奉りしわたりにてまいりよ
 るへく侍しかとはしたなくおほえ侍てえさし
 いて侍らてみ山かくれのくち木になりにて侍
 るなり小侍従はいつかうせ侍にけんそのかみ

40
ウ

のわかさかりと見侍りし人はかすゝくなく
 り侍にけるすゑの世におほくの人にをく
 るゝ命をかなしく思給へてこそさすかにめく
 らひ侍れなときこゆるほとにれの明はて
 ぬよしさらはこの昔物かたりはつぎすへくなん
 あらぬ又人きかぬ心やすき所にてきこえん
 侍従といひし人はほのかにおほゆるは五六は
 かりなりしほとにやはかにむねをやみ
 てうせにきとなんきくかゝるたいめなくはつみ
 をもき身にて過ぬへかりける事などの

41
才

たまふ・さゝやかにをしまきあはせたるほと
 ものかひくさをふくろにぬゝいれたるとり
 いてゝたてまつる・御まへにてむしなはせ給
 へ我猶いくへくもあらずなりにたりとのたまは
 せてこの御ふみをととりあつめて給はせたり
 しかは小侍従に又あひみ侍らんついてにさた

かにつたへまいらせむと思給へしをやかてわかれ
侍にしもわたくしことにはあらずかなしうなむ
思たまふるときこゆ・つれなくてこれはかくい
給つかやうのふる人はとすかたりにやあや

41
ウ

しきことのためにいひいつらんとくるしくおほ
せと返々もちらさぬよしをちかひつるさもやと
又思ひみたれ給・御かゆこはいぬなとまいり給
昨日はいとま日なりしをけふはうちの御物いみ
もあきぬらん院の女一宮なやみ給御とふら
ひにかならずまいるへければかた／＼いとまな
く侍るを又このころ過して山のもみちちらぬ
さきにまいるへきよし聞えたまふ・かくしは／＼
たちよらせ給ふをひかりに山のかけもすこし
物あきらむる心ちしてなんなとよろこひ聞え

42
オ

給・かへり給てまつこのふくろを見給へはからの
ふせむれうをぬひて上といふをしをうへに

かきたりほそきくみしてくちのかたをゆひた
るにかの御名のふうつきたりあへるもおそ
ろしうおほえ給色々のかみにて玉さかにかよ
ひける御ふみのかへりこと五六そあるさては
かの御方にてやまひはおもくかきりになり

にたるに又ほのかにも聞えむことがたくなりぬ
るをゆかしう思ことはそひにたり御かたちも
かはりておはしますらんかさま／＼かなしきこと

42
ウ

をみちのくにかみ五六まひにつふ／＼とあやし
きとりのあとのやうにかきて

めのまへにこの世をそむく君よりもよそに
わかるゝ玉そかなしき又はしにめつらしくきゝ
侍るふたはのほともうしろめたう思たまふる
かたはなけれと

命あらはそれともみまし人しれぬ岩ねに
とめし松のをひすゑかさきたるやうにいと
みたりかはしくて侍従の君にとつへにはかきつけ

たりしみといふむしのすみかになりてふるめ

きたるかひくさゝなからあとはきえすたゝいま

かきたらんにもたかはぬことのはとものこま／＼と

さたかなるを見たまふにけにおちゝりた^たら

ましよとうしろめたういとおしきことゝもなり

かゝる事世に又あらんやと心ひとつにいとゝ物

おもはしさそひてうちへまいらんとおほしつるも

いてたゝれす宮の御まへにまいり給へれば

いとなに心なくわかやかなるさまし給て経

よみ給をはち^ら ひてもてかくし給へるなにかは

しりにけりともしられたてまつらんなと心に

こめてよろつにおもひゐたまへり

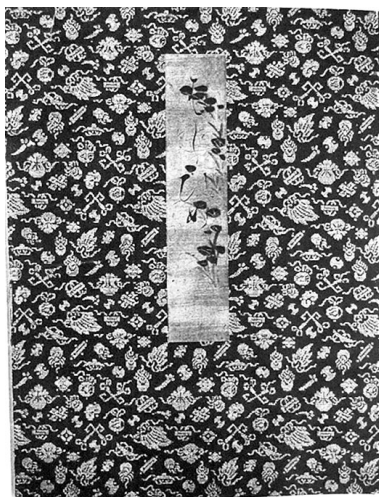
注

- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七卷二号（中京大学文学部 平成二五年三月）
- (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」『文学部紀要』第四八卷一号（中京大学文学部 平成二五年十月）
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆 帚木」『文学部紀要』第四八卷二号（中京大学文学部 平成二六年三月）
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆 空蟬 岡本主水筆 夕顔」『文学部紀要』第四九卷一号（中京大学文学部 平成二六年十月）
- (5) 注4に同じ。
- (6) 「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆 若紫 石井了俱筆 末摘花 左馬助筆 花宴」『文学部紀要』第四九卷二号（中京大学文学部 平成二七年三月）
- (7) 「長谷川端蔵『源氏物語』東寺観智院筆 葵 岡本主水筆 賢木 北左平次行生筆 花散里」『文学部紀要』第五〇卷一号（中京大学文学部 平成二七年十月）
- (8) 「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆 須磨 岡本主水筆 明石 潯標」『文学部紀要』第五〇卷二号（中京大学文学部 平成二八年三月）
- (9) 注6に同じ。
- (10) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」『文学部紀要』第四六卷二号（中京大学文学部 平成二四年三月）
- (11) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」『文学部紀要』第四七卷一号（中京大学文学部 平成二四年十月）
- (12) 注6に同じ。
- (13) 注7に同じ。
- (14) 注7に同じ。

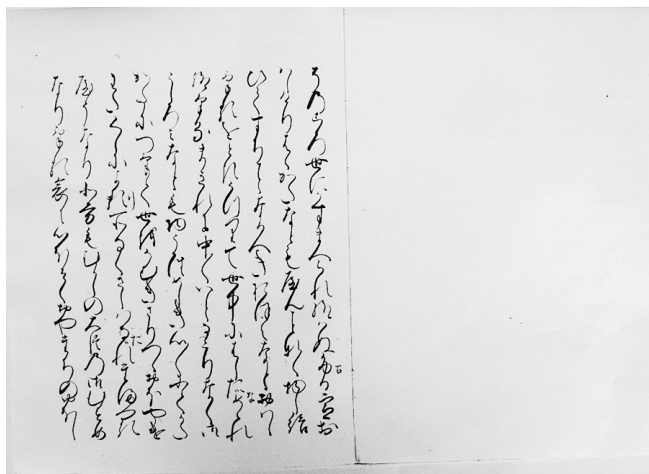
(17) 注
6
に
同
じ。

(16) 注
4
に
同
じ。

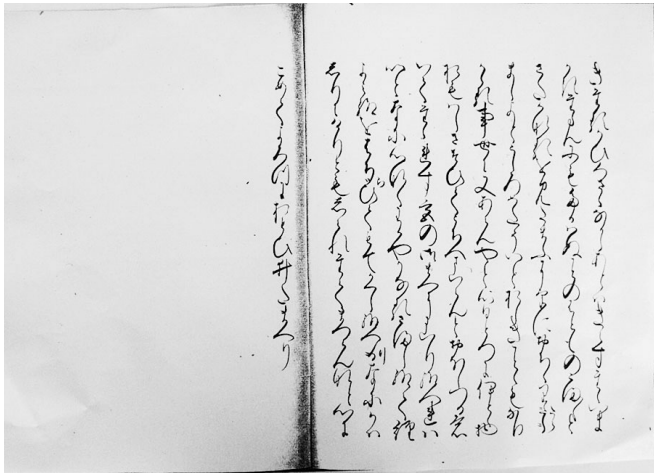
(15) 注
8
に
同
じ。



橋姫 表紙



橋姫 1 才



橋姫 終丁